

高校日语专业基础课系列教材

总主编·胡振平

南开大学出版社

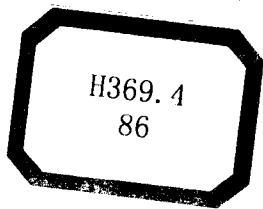


何建军 臧运发 史军·编著

# ぶんがく

Riben Jinxiantai Wenxue Xuandu

日本近现代文学选读



高校日语专业基础课系列教材

# 日本近现代文学选读

何建军 臧运发 史军 编著

南开大学出版社  
天津

## 图书在版编目(CIP)数据

日本近现代文学选读 / 何建军, 臧运发, 史军编著.  
天津: 南开大学出版社, 2006. 2

(高校日语专业基础课系列教材)

ISBN 7-310-02474-5

I. 日... II. ①何... ②臧... ③史... III. ①日语  
— 阅读教学 — 高等学校 — 教材 ②文学 — 作品 — 简介 — 日  
本 — 现代 IV. H369. 4: I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2005)第 137670 号

**版权所有 侵权必究**

南开大学出版社出版发行

出版人: 肖占鹏

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502200

\*

河北昌黎太阳红彩色印刷有限责任公司印刷

全国各地新华书店经销

\*

2006 年 2 月第 1 版 2006 年 2 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 15.25 印张 419 千字

定价: 25.00 元

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

# 总 序

随着时代的发展，要求学生不仅在语言方面要有扎实的基本功，还要有较强的日语实践能力，具备一定的文化知识。为了适应新时代的这一要求，加强对学生素质的培养，我们解放军外国语学院经过多年的教学积累，推出了《高等院校日语专业系列教材》。本套教材编写的依据是《高等院校日语专业教学大纲》，在注意传授基础知识，加强听、说、读、写、译几方面技能的同时，还注意培养学生的日语综合能力，扩大视野、拓宽知识面。

本套教材主要有以下几个特点：

第一、教材体系完整 本套教材涵盖了除精读教材（《现代日本语》已由上海外语教育出版社出版，共六册由胡振平教授主编）以外高等院校的常设课程教材，其中包括《新编日语阅读》、《新编日语听力》、《新编日语会话》、《新编日语翻译》、《现代日语——口语法》、《现代日语——文语法》和《日本文学选读》等共 15 册。按照具体的课程设置要求，教材分别与相应年级的教学内容配套，由浅至深、循序渐进，便于学生逐步吸收教材的内容并完成教材提出的训练要求。

第二、内容侧重点强 本套教材是严格按照教学大纲的要求来编写的，因此每套教材的内容都与相应课程紧密结合，注意从不同侧面培养学生的语言应用能力以及有关的日本语言、文化、文学等方面的知识。

第三、便于教学使用 本套教材对于主干课程教材还配备了教师用书，便于教师在备课时参考和学生自学时使用。

由于教材编写工作量大，质量要求高，因此难免有不足之处，希望日语界同仁不吝赐教，同时也欢迎读者批评、指正。

另外，在这里谨向对这套教材的出版给予大力支持的南开大学出版社表示深深的谢意。

主 编  
2004 年

## 前 言

本书是由南开大学出版社推出的“高校日语专业基础课系列教材”之“日本文学选读”课教材，供日语语言文学专业高年级学生使用。

本书共编选了十七篇课文，选收了日本近现代文学史上主要流派代表作家的16篇小说，鉴于日语专业四年级学生要参加由教育部高等学校外语专业教学指导委员会组织实施的“高校日语专业八级考试”，其中含日本短歌鉴赏等内容，特编写了一课“近代和歌鉴赏”。课文基本上按照作家在文学史上出现的先后顺序排列。为保持原作的风貌，所选课文以日本出版的原著为底本，文中汉字和假名拼写法均从原著，全书未统一使用现代汉字和现代假名拼写法。

为便于学生更好地理解课文内容，每篇课文后面附有注释、作家介绍和作品鉴赏。鉴于高年级学生已具备较扎实的日语语言功底，以上内容均用日语撰写。对课文中难懂的单词、方言以及有关社会、文化、历史背景、风土人情等背景材料进行了较详尽的解释；简要介绍了课文作者的生平、主要作品及其在日本文学史上的地位；简述了课文的内容梗概，对所选作品的主题思想、艺术风格等进行了简要的评析。此外，为使学生对日本近现代文学的发展有一个概括的认识，在书后附有“日本近现代文学史简表”。

由于编者水平有限，书中难免有纰漏或不妥之处，敬请使用本教材的各位老师和同学批评指正。

编 者

2005年6月

# 目 次

## 上編

- 第一課 浮雲……………二葉亭四迷 (3)
- 第二課 五重塔……………幸田露伴 (24)
- 第三課 破戒……………島崎藤村 (46)
- 第四課 坊っちゃん……………夏目漱石 (73)
- 第五課 青年……………森鷗外 (106)
- 第六課 播州平野……………宮本百合子 (130)
- 第七課 鼻……………芥川龍之介 (169)
- 第八課 伊豆の踊子……………川端康成 (182)
- 第九課 近代和歌の鑑賞……………鈴木正彦 (213)

# 目 次

## 下編

- 第十課 細雪……………谷崎潤一郎 (227)
- 第十一課 走れメロス……………太宰治 (271)
- 第十二課 桜島……………梅崎春生 (289)
- 第十三課 潮騒……………三島由紀夫 (321)
- 第十四課 魔法のチョーク……………安部公房 (361)
- 第十五課 個人的な体験……………大江健三郎 (379)
- 第十六課 ノルウェイの森……………村上春樹 (417)
- 第十七課 雪舞……………渡辺淳一 (444)
- 日本近現代文学史年表…………… (466)

上 编





# 第一課 浮雲（抄）

ふたばていしめい  
二葉亭四迷

## 第四回 言うに言われぬ胸の中

さてその日もようやく暮れるに間もない五時ごろになっても、叔母<sup>[1]</sup>もお勢<sup>[2]</sup>もさらに帰宅する光景も見えず、いつまで待っても果てしのない事ゆえ、文三<sup>[3]</sup>は独り夜食を済まして、二階の縁端<sup>えんきぎ</sup>に端居<sup>はし</sup>し<sup>[4]</sup>ながら、身を丁字欄干<sup>ていじらんかん</sup><sup>[5]</sup>に寄せかけて暮れ行く空をながめている。<sup>[6]</sup>この時日はすでに万家の棟に没しても、なお余残の影を留めて、西の半天を薄紅梅に染めた。顧みて東方の半天をながむれば、<sup>あつさり</sup>とあがった水色、諦視<sup>なげめつめ</sup>たら<sup>[7]</sup>宵星の一つ二つはほじり出せそうな空合。幽かに聞こえる伝通院<sup>でんつういん</sup><sup>[8]</sup>の暮鐘の音に誘われて、<sup>ねぐら</sup>埒へ急ぐ夕鴉<sup>ゆうからす</sup>の聲が、あちこちに聞こえてやかましい。すでにして日はパツタリ暮れる、あたりはほの暗くなる。仰向いてみる蒼空には、余残の色もいつしか消えうせて、今は一面の青海原、星さえ所斑<sup>ところまだら</sup>にきらめき出でて殆んど交睫<sup>まばたき</sup>をするようなまねをしている。今しがたまで見えぬ隣家の前栽<sup>ぜんさい</sup><sup>[9]</sup>も、蒼然たる夜色に偷<sup>ぬす</sup>まれて<sup>[10]</sup>、そよ吹く小夜嵐に立ち樹の所存を知るほどの闇さ。デモ土蔵の白壁はさすがに白いだけに、見透かせば見透かされる……サツと軒端近くに羽音がする、ふりかえって観る……何も眼にさえぎるものとはなく、ただもう薄ぐらいのみ。

心ない身も秋の夕暮れには哀<sup>あわ</sup>れを知るが習い<sup>[11]</sup>、まして文三は糸目の切れた奴唄の身の上、その時々<sup>まがき</sup>の風次第で落ち着く先は籬<sup>[12]</sup>の梅か物干しの竿か、見きわめの付かぬ所が浮世とは言いながら、

父親が没してからまる十年生死の海のうやつらや<sup>[13]</sup>の高波に揺られ揺られてかろうじて泳ぎだした官海<sup>[14]</sup>もやはり波風の静まる間がないことゆえ、どうせ一度は捨小舟の寄る辺ない身になろうも知れぬとかねて覚悟をして見ても、そこが凡夫のかなしきで、危うきに慣れて見れば苦にもならずあてにならぬ事をあてにして、文三は今歳の暮れにはお袋を引き取って、チト老楽をさせずばなるまい、国へ帰ると言ってもまさかに素手でもいかれまい、親類の所へ土産は何にしよう、「ムキ<sup>[15]</sup>」にしようか品物にしようかと、胸で弾いた算盤の桁は合いながらも、ともかく合いかねるは人の身のつばめ<sup>[16]</sup>、今まで見ていた盧生の夢<sup>[17]</sup>も一炊の間にさめ果てて「アアまた情けない身の上になったかナア<sup>[18]</sup>……」

にわかにはパツと西の方が明るくなった。見かけた夢をそのままに、文三が振り返って視やる向こうは隣家の二階、戸を繰り忘れたものか、まだ障子のままで人影が射している……スルトその人影が見る間にムクムクとふくれ出して、よい加減の怪物となる……パツと消えうせてしまったあとはまた常闇。文三はホツと吐息をついて、願みてわが家の中庭をみおろせば、所狭きまで植えならべた草花立樹などが、わびしげに啼く<sup>[19]</sup>虫の音を包んで、黯黒の中からヌツと半身をぬき出して、ガラス張りの障子を漏れる火影を受けている所は、家内をうかがう曲者かと怪しまれる……ザワザワと庭の樹立をもむ夜風の、あまりに顔を吹かれて<sup>[20]</sup>文三は、ぶるぶると身震いをして起ちあがり、居間へ入って手探りでランプを点し、立て膝の上に両手を重ねて、何をともなく、みつめたまま、しばらくはただぼんやり……ふと手ぢかにあつた薬罐の白湯を、茶碗にくみ取りて一息にグツと飲みほし、肘を枕に横に倒れて、天井に円く映るランプの火橙をみつめながら、にっこり片頬に微笑を含んだ<sup>[21]</sup>が、あいた口が結ばって前歯が姿を隠すにつれ、いづくからともなくまた愁いの色が顔にあらわれてまいった。

「それはそうとどうしようかしらん。到底言わずには置けん事た

[22]から、今夜にも帰ッたら、おもいきって言ッてしまおうかしらん。さぞ叔母がいやな面をする事たろうナア……………目に見えるようだ……………しかしそんな事を苦にしていた分にはらちが明かない、何もこれが金銭を借りようというではなし、すこしも恥ずかしい事はない[23]。チョッ今夜言ッてしまおう……………だが……………お勢がいては言いにくいナ。もしヒョット彼<sup>あれ</sup>[24]の前でいや味なんぞを言われちゃア困る。これはなんでもいない時を見て言う事だ。いない……………時を……………見……………なぜ。なぜ言いにくい。いやしくも男児たる者が零落したのを恥ずるとはなんだ[25]。そんな小胆な。くそッ今夜言ッてしまおう。それはもちろん彼娘だッて口へ出してこそ言わないがなんでも来年の春を楽しみにしている[26]らしいから、今だしぬけに免職になったと聞いたら定めて落胆<sup>らくたん</sup>するだろう。しかし落胆したからと言ッて心変わりをするようなそんな浮薄<sup>うはく</sup>な婦人<sup>おんな</sup>じゃアなし、かつ通常の婦女子と違ッて教育もある[27]ことだから、大丈夫そんな気づかいはない。それは決してないが、叔母だて……………ハテナ叔母だて。叔母はああいう人だ[28]から、おれ[29]が免職になったと聞いたら急にお勢をくれるのがいやになッて、無理に我娘を他にかたづけまいとも言われぬ。そうなたからと言ッてこっちは何も確い約束がしてあるんでないから、いやそうはなりませんとも言われぬ……………ああつまらんつまらん、いくらおもい直してもつまらん。全体なぜおれを免職にしたんだろう、わからんナ。自惚<sup>うぬぼ</sup>れじゃアないがおれだッて何も役に立たないという方でもないし、また残された者だッて何も別段役に立つという方でもなし、して見ればやっぱり課長におベツからなかつた[30]からそれで免職にされたのかな……………実に課長は失敬な奴だ。課長も課長だが残された奴らもまた卑屈きわまる。わずかの月給のために腰を折ッて、奴隷同様なまねをするなんぞッて実に卑屈<sup>ひくつ</sup>きわまる……………しかし……………待てよ……………しかし今まで免官になッてほどなく復職した者がないでもないから、ヒョットして明日にも召喚状が……………イヤ……………来ない、召喚状なんぞ来てた

まるものか。よし来たからと言って今度はこっちから辞してしまう、だれが何と言おうとかまわない、断然辞してしまう。しかしそれも短気かナ、やっぱり召喚状が来たら復職するかナ……ばかめ、それだからおれはばかだ、そんな架空な事をあてにして心配するとはなんだばかめ。それよりかまず差し当たりエートなんだッけ……そうそう免職の事を叔母に咄して……さぞいやな顔をするこつたろうナ……しかし咄さずにも置かれないから思い切って今夜にも叔母に咄して……ダガお勢のいる前では……チョッいる前でもかまわん、叔母に咄して……ダガもし彼娘のいる前で口ぎたなくでも言われたら……チョッかまわん、お勢に咄して、イヤ……お勢じゃない叔母に咄して……さぞ……いやな顔……いやな顔を咄して……口……口ぎたなく咄……して……アア頭が乱れた……」

ト、ブルブルと頭を左右に打ち振る。

轟然と駆けて来た車の音が、家の前でパツタリ止まる。ガラガラと格子戸のあく、ガヤガヤと人声がする。ソリヤコソ<sup>[31]</sup>と文三が、まず起き直って突胸をついた<sup>[32]</sup>。両手を杖に起たんとしてはまたすわり、すわらんとしてはまた起つ。腰の蝶番は満足でも、胸の蝶番が「言ッてしまおうか」「言いにくいナ」と離ればなれになっているから、急には起ちあがれぬ……にわかむつくと起ちあがって梯子段の下り口までまいったが、ふと立ち止まり、すこしためらッて、「チョッ言ッてしまおう。」と独り言を言いながら、足ばやに二階を降りて奥坐舗へ立ち入る。奥坐舗の長手の火鉢の傍<sup>かたわら</sup>に年配四十格好の年増、すこし瘦肉で色が浅黒いが、小股の切り上がった<sup>[33]</sup>、垢抜けのした、どこともでんぼう肌<sup>[34]</sup>の、萎れてもまだ見どころのある花<sup>くしま</sup>。櫛巻<sup>[35]</sup>とかいうものに髪を取り上げて、小弁慶の糸織<sup>いとお</sup><sup>[36]</sup>の裕衣<sup>あわせ</sup>と養老<sup>[37]</sup>の浴衣<sup>[38]</sup>とを重ねたやつを素肌に来て、黒襦子と八段の腹合わせの帯<sup>[39]</sup>をヒッカケに結び<sup>[40]</sup>、ほろ酔いきげんのくわえ楊枝<sup>ようじ</sup>でいびつにすわっていたのはお政で、文三の挨拶するを見て、

「ハイただいま、大層遅かったろうネ。」

「ぜんたい今日はどちらへ。」

「今日はネ、須賀町<sup>すがちやう</sup><sup>[41]</sup>から三筋町<sup>みつじまち</sup><sup>[42]</sup>へ回ろうと思つて家を出たんだアネ。そうするとネ、須賀町へいったらツイ近所に、あれはエート芸人………なんとか言つたツけ、芸人………」

「親睦会。」

「それぞれその親睦会があるからいっしょにいこうつてネお浜さんが勧めきる<sup>[43]</sup>んサ。わたしは新富座<sup>しんとみざ</sup><sup>[44]</sup>か二丁目<sup>[45]</sup>ならともかくも、そんな珍木会とか親睦会とか<sup>[46]</sup>いう者なんざア七里七里けばい<sup>[47]</sup>だけれども、お勢………ウーイブー<sup>[48]</sup>………お勢がいきたいというもんだからしょう事なしのお交際<sup>つきあい</sup>でいって見たがネ、思つたよりはサ。わたしはまた親睦会というから大方演じゅつ会<sup>おおかた</sup><sup>[49]</sup>のような種<sup>たち</sup>のもんかしらとおもつたら、なアにやっぱり品のいい寄席<sup>よせ</sup>だネ。こんだ文さんもいってごらん、木戸<sup>[50]</sup>は五十銭だヨ。」

「ハアそうですか、それではいずれまた。」

説話<sup>はなし</sup>がすこしとぎれる。文三の肚<sup>はら</sup>の裏<sup>うち</sup>に「おなじ言うのならお勢のいない時だ、チョッ今言つてしまおう」ト思い決めて今まさに口を開かんとする………折しも縁側にバタバタと足音がして、スラリと背後<sup>うしろ</sup>の障子があく、振りかへつて見れば………お勢で、年は鬼もという十八の娘盛り<sup>[51]</sup>、瓜実顔で富士額<sup>うりざねがお</sup>、生死を含む目もとの塩<sup>いきしに</sup><sup>[52]</sup>にピンとはねた眉<sup>りきみ</sup><sup>[53]</sup>で力味を付け、壺々口<sup>つぼつぼぐち</sup><sup>[54]</sup>の緊め笑いにも愛嬌をくくんでむやみに滴<sup>こぼ</sup>さぬ<sup>[55]</sup>ほどのさび<sup>[56]</sup>、背はスラリとして風に揺らめく女郎花<sup>おみなえし</sup>の、一時をくねる細腰<sup>[57]</sup>もしんなりとしてなよやか、慾にはもうすこし生えぎわと襟足とをよくしてもらいたい<sup>[58]</sup>が、何しても七難を隠すという雪白<sup>ゆきしろ</sup>の羽二重肌<sup>はぶたえはだ</sup><sup>[59]</sup>、浅黒い親には似ぬ鬼っ子でない天人娘<sup>てんにんむすめ</sup><sup>[60]</sup>、艶やかな黒髪を惜しげもなくグツと引つ詰めての束髪<sup>はなかんざし</sup><sup>[61]</sup>、薔薇の花挿頭<sup>べに</sup><sup>[62]</sup>をさしたばかりで臙脂もなめねば鉛華もつけず<sup>[63]</sup>、衣服とても糸織りの袷衣に友禪<sup>むらさきじゆず</sup>と紫襦子の腹合わせの帯<sup>[64]</sup>か何かでさして取り繕いもせぬが、わざとならぬながめはまた格

別なもので、火をくれて枝を<sup>たわ</sup>撓めた作り花のいや味のある色の及ぶ所でない。衣透姫<sup>そとおりのめ</sup>[65]に小町<sup>こまち</sup>[66]の衣を懸けたという文三の<sup>みたて</sup>品題は、それはほれた欲目のひいきざた<sup>ひいきざた</sup>[67]かもしれないが、とにもかくにも十人並み優れて美しい。坐舗<sup>ざしき</sup>へ入りざまに文三と顔を見合わせてにっこり、チョイと会釈をして摺り<sup>す</sup>足<sup>あし</sup>でズーと火鉢のそばまでまいり、しとやかに座に着く。

お勢と顔を見合わせると文三は不思議にもガラリ気が変わって、咽元<sup>のどもと</sup>まで込み上げた免職<sup>うの</sup>の二字を鵜呑<sup>う</sup>みにして何食<sup>はら</sup>わぬ顔色、肚<sup>はら</sup>の裏で「もうすこしたってから。」

「おっかさん、咽がかわいていけないから、お茶を一杯入れてくださいナ。」

「アイヨ。」

トいってお政は茶箆<sup>ちばし</sup>筒<sup>つつ</sup>をのぞき

「オヤオヤ茶碗がみんな汚れてる……………鍋。」

ト呼ばれて出て来た者を見れば例の日の丸の紋を染め抜いた首<sup>くび</sup>[68]の持ち主で、空うそぶいた<sup>あそぶ</sup>[69]鼻のさきへ突き出された汚れ物を受け取り、振り栄えのあるお尻を振り立ててひき退がる。やがて洗って持ってきた。茶を入れる。サアそれから今日聞いて来た歌曲のうわさで、母子<sup>おやこふた</sup>二つの口が結ばる暇なし。免職<sup>めんしやく</sup>の事を吹聴<sup>ふいちょう</sup>[70]したくも言い出す潮がないので、文三は余儀なく聴きたくない咄<sup>はなし</sup>を聞いて空しく時刻を移すうち、説話<sup>せつわ</sup>はようやく清元長唄<sup>きよもとながうた</sup>[71]の優劣論に移る。

「おっかさんは自分が清元ができるもんだからそんな事をお言いただけれども、長唄の方がいいサ。」

「長唄も岡安<sup>おかやす</sup>[72]ならまんざらでもないけれども、松永はただつこむばかりでおもしろくもなんともありやアしない、それよりか清元の事サ、どうも意気でいいワ。「四谷<sup>よつや</sup>で始めて逢うた時<sup>とき</sup>[73]、すいたらしいと思うたが、因果な縁の糸車。」

ト中音で口癖の清元を唄ってケロリとして

「いいワ。」

「その通り品格がないからきらい。」

「また始まった、ヘン跳馬<sup>じゃじゃうま</sup>じゃアあるまいし、万古に<sup>[74]</sup>品々<sup>[75]</sup>もうるさい。」

「だって人間は品格が第一ですワ。」

「ヘンそんなにお人柄なら、煮込みのおでんなんぞは食べたいといわないがいい。」

「オヤいつわたしがそんな事を言いました。」

「ハイー昨日の晩いいました。」

「うそばっかし<sup>[76]</sup>。」

トハ言ッたが大きにへこんだ<sup>[77]</sup>ので大笑いとなる。ふとお政は文三の方を振り向いて

「アノ今日出がけにおっかさんの所から郵便が着いたッけ<sup>[78]</sup>が、おうけとりか。」

「アほんにそうでしたッけ、さっぱり忘れていました……………エー母からもこのたびは別段に手紙を差し上げませんがよろしく申し上げると申すことで。」

「ハアそうですか、それは。それでもおっかさんはいつもおかわんなすったこともなくって。」

「ハイ、おかげさまと丈夫だそうで。」

「それはマア何よりの事だ。さぞ今年の暮れを楽しみにして<sup>[79]</sup>およこしなすつたろうネ。」

「ハイ、指ばかり<sup>お</sup>届していると申してよこしましたが……………」

「そうだろうネ、かわいい息子さんのそばへ来るんだものヲ。それをネーどこかの人みたように、親をばかにしてサ、一口いう二口目にはじきに揚げ足を取るようだと言われなくても、文さんは親思いだからおっかさんの恋しいのもまた一倍サ。」

トお勢をしり目にかけてからみ文句であてる<sup>[80]</sup>。お勢はまた始まったという顔色をしてあちらを向いてしまう、文三は余儀なさそう



にエへへ笑いをする。

「それからアノ一例の事ネ<sup>[81]</sup>、あの事をまた何とか言っておよこしなすったかい。」

「ハイ、また言っておよこしました。」

「なんってネ。」

「ソノ一気心がわからんからいやだというなら、エー今年の暮れ帰省した時に逢ってよく気心をみぬいた上できめたらよかろうといっておよこしましたが、しかし……<sup>[82]</sup>」

「なに、おっかさん。」「エ。ナニサ。アノ。ソラお前にもこの間話したアネ。文さんの……」

お勢は独りしきりにうなずく。

「へーそんな事を言っておよこしなすったかい、へーそうかい……それにつけても早く内で帰って来ればいいが……イエネ<sup>こないだ</sup>此間もお咄し申した通りお前さんのお嫁の事についてちゃア内でもちいと考へてる事もあるんだから……もつともわたしも聞いて知ってる事だから今咄してしまってもいいけれども……」

トすこし考へて

「いつ返事をお出しだ。」

「返事はもう出しました。」

「エ、モー出したの、今日。」

「ハイ。」

「オヤマア文さんでもない<sup>[83]</sup>、わたしになんとか一言咄してからお出しならいいのに。」

「デスガ……」

「それはマアともかくも、何と言っておあげた。」

「エー今はなかなか婚姻どころじゃアないから……」

「アラそんな事を言っておあげじゃアおっかさんがな心配なさるアネ。それよりか……」

「イエまだお咄し申さぬから何ですが……」